

追播による植生改善

【課題】

- 草地面積が不足しており、草地更新を行う余裕がありませんでした
- 草地に傾斜が多く、耕起すると更新後に雨水による表土の流亡の懸念がありました
- 草地の経年化が進み、植生が悪化していました

【取組】

- 経年草地への早春は種による牧草栽培
- 牧草収穫後は、植生の悪化した箇所には種を行います
- 草地を良く観察し、優先順位をつけます
- 秋に堆肥を還元し、地力の増進を図ります
- ※上記を開始し5年以上経過したが、は種方法は試行錯誤を繰り返し、現在の作業機に落ち着く
- 全ほ場で実施

（草種）

＊チモシー、オーチャードグラス、ペレニアルライグラス、アルファルファを植生に応じて、は種量やそれぞれの割合を調整

（作業スケジュール）

- ＊5月上旬に早春施肥
- ＊5月中旬に追播
- ＊1番草、2番草収穫後の植生、裸地の状況によって追播
- ＊2番草収穫後、堆肥散布

【成果】

- 牧草割合が増え、収量が増えました
- 放牧地の採食量が向上しました
- 追播による植生維持の取組みは、耕起する草地更新よりコストを抑えられ、植生の状態も満足できるレベルとなりました



<ほ場の様子>

- 2番草収穫後の状況（R5年9月）では、イネ科やマメ科牧草が“スジ状”に生育しているのがわかる

<追播用作業機械の紹介>

- 表土の露出（爪）⇒ は種 ⇒ 鎮圧 が一工程でできる作業機を使用（作業幅は6m）
- 一連の工程により、種子が覆土、鎮圧されるため、牧草の定着は良いと感じる
- 表土の“露出”がポイントで、タイミングは「スプリングフラッシュ」の前が良い

